

1 8	豊田	本城小学校	氏名	フクドメ 福留	ナオ 直
分科会番号		1 9	分科会名		読書・学校図書館

研究題目

多様な情報源を活用し、地域の魅力を探究する児童の育成 — 3・4年 総合的な学習の時間「小原二フレル」の実践を通して —

1 主題設定の理由

本学級は、3年生4名、4年生8名、計12名の複式学級である。

児童は図書資料やインターネットを活用した調べ学習に意欲的であり、事前アンケートでは全員が「とても好き」または「好き」と答えた。一方で、資料から必要な情報を抜き出すことには課題があり、資料に書いてあることをそのまま丸写ししたり、自分の問いとずれたことを抜き出したりする傾向がある。

児童はこれまでに、生活科や総合的な学習の時間での活動を通して、地域の自然や伝統に触れてきた。しかし、地域の魅力について、曖昧に捉えている部分も多く、一人一人が思いをもったり、自分の言葉でよさを伝えたりすることはできていない。地域の魅力をより深く知るには、さらなる探究が必要であると考えた。

このような実態を踏まえ、総合的な学習の時間では、「OBARA BIG4（四季桜・小原の民話・小原和紙・小原歌舞伎）」の調査活動をすることにした。その中で、図書資料やインターネット、現地調査、地域の人へのインタビューなど、多様な情報源から必要な情報を得て、地域の魅力を探究する児童を育成したいと考え、本研究の主題を設定した。

2 目指す子ども像

多様な情報源を活用し、地域の魅力を探究する児童の育成

3 仮説と手だて

- 〈仮説1〉課題設定の場面で、児童が自ら課題や問いをもてるように工夫すれば、興味・関心をもって探究活動に取り組めるだろう。
- 〈仮説2〉多様な情報源を児童に提示することで、主体性を向上させたり、情報活用能力を育んだりすることができるだろう。
- 〈仮説3〉図書資料を使った基本的な調べ方について学習し、その方法で繰り返し調べ学習に取り組むことで、必要な情報を得る力が身につくだろう。

〈仮説1〉に対する手だて

《手だて①》思考ツールの活用

自分たちと地域とのつながりを捉えさせるために、ウェビングマップを活用し、探究課題を設定させる。その後、ペンタゴンチャートを活用して、「OBARA BIG 4」のそれぞれについて問いづくりを行うことで、興味・関心をもって探究活動を始められるようにする。

〈仮説2〉に対する手だて

《手だて②》「OBARA BIG 4 コーナー」の設置

図書館司書や他の教員と協力し、本やパンフレットを集め、学校図書館にコーナーを作る。また、QRコードで関係するウェブサイトにもアクセスできるようにする。探究活動のために十分な環境を常に整えておくことで、児童の主体性や情報活用能力を向上させる。

〈仮説3〉に対する手だて

《手だて③》教科横断的な調べ学習の取り組み

中央図書館出前講座で学んだ、付箋を用いた調べ方を生かし、国語科や社会科で調べ学習を行う。その後、総合的な学習の時間の中で調べ学習が必要になったときに、他教科で繰り返してきた学びを生かすことで、調べる力を身につけていく。

4 抽出児童について

	実態	願い
A 児 (3 年)	調べ学習のとき、理解できていない情報をそのまま丸写ししたり、手が止まってしまったりすることが多い。地域学習にもあまり意欲がもてない。	自分で課題を設定したりすることで、意欲をもって取り組めるようになってほしい。また、多様な情報源から、必要な情報を得られるようになってほしい。
B 児 (4 年)	小原歌舞伎とかかわりがあるが、伝統や歴史については、ほとんど知らず、自信をもって表現することができない。	探究活動を通して、小原の伝統や歴史に触れ、地域の魅力について自信をもって伝えられるようになってほしい。

5 単元計画

(1) 単元の目標

- ・小原の伝統文化や地域の特色について、図書資料・インターネット・現地調査・インタビューなどから、必要な情報を適切に収集することができる。(知識・技能)
- ・付箋や画用紙を活用して、協働的に情報を整理・分析することで自分の考えを構築し、相手や目的に応じて分かりやすく表現することができる。(思考・判断・表現)
- ・地域の人々との関わりや体験活動を通して、小原の魅力を再発見し、地域の一員としての自覚と誇りをもって学びに向かうことができる。(学びに向かう力・人間性)

(2) 単元の流れ (全50時間)

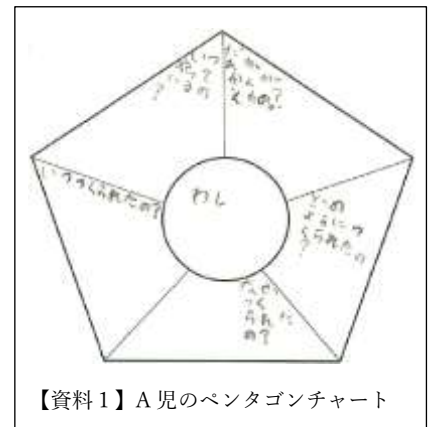
	時数	学習活動	教師の支援・手だて
第一次 課題の設定	1～2	・小原の伝統的な文化や特色について、これから自分が知りたいことを見つけ、「問い」をつくる。 ・学習計画を立てる。	・自分と地域とのつながりを捉えさせたり、探究課題を設定したりするために、思考ツールを活用する。
第二次 情報の収集 整理・分析	3～5	・中央図書館出前講座を活用し、図書資料を使った調べ方の手順を学ぶ。 ・「OBARA BIG4」コーナーにある図書資料を使って調べる。	・情報の丸写しにならないように、出前講座で情報収集のしかたを学ぶ機会を設ける。
	6 ～ 14	・現地調査の準備をする。下調べをして、インタビューの内容を考える。 ・現地調査に行き、見て気づいたことをメモしたり、インタビューをしたりする。 ・調査に協力してくださった地域の方にお礼の手紙を書く。	・図書資料やインターネットからでは得られないことを感じられるよう、校外学習を計画する。 ・一人一人が自己有用感をもって参加できるように、インタビューを分担する。
	15 ～ 16	・現地調査で分かったことや調べて分かったことを整理する。 ・分かったことを分類し、見出しをつける。	・情報を整理する方法として既習の分類法を想起させる。 ・学級全員の発見したことをまとめられるように、画用紙と付箋を用意する。
第三次 まとめ・表現	17 ～ 30	・冷田小学校への発表方法について話し合う。 ・発表に向けて、資料をつくる。 ・冷田小学校へオンラインで発表する。	・相手意識と目的意識をもって発表方法を吟味できるように、今後2回ある発表の違いを捉えさせる。
	31 ～ 33	・発表を振り返り、よかった点と改善点をまとめる。 ・発表会に向けて、再度図書資料を用いて調べ直す。	・調べが足りなかった分野について再度調べられるように、図書資料の数を増やす。
	34 ～ 50	・学習発表会に向けて、準備をする。 ・学習発表会で、これまでに学んだことを発表する。 ・振り返りをする。	・一人一人が自信をもって表現できるように、感想やアドバイスを伝え合う時間を繰り返し設ける。

6 実践と考察

(1) 思考ツールの活用《手だて①》

第1時に、ウェビングマップを活用した。これまでの地域学習を想起しながら、「小原」を中心として関連する言葉を線で結んで広げていった。B児は、自身に取り組んでいる「小原歌舞伎」を挙げ、「今まで小原歌舞伎について調べたことがないから、今年はやってみたい」と発言した。

第2時では、前時で絞ったテーマについて、ペンタゴンチャートを活用し、5W1Hを使ってそれぞれの問いを立てた。A児はペンタゴンチャートに取り組みながら、「小原和紙がいつ、どこで作られたか全然知らないから知りたいな」と発言した【資料1】。



【資料1】A児のペンタゴンチャート

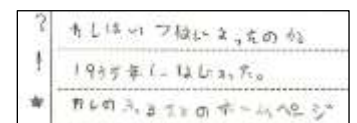
(2) 「OBARA BIG 4コーナー」の設置《手だて②》

夏休み中に図書館司書や他の教員と協力して、学校図書館にコーナーを設置すると、児童は興味をもって学校図書館に足を運び、「OBARA BIG 4」コーナーにある図書資料に触れていた。B児は、「小原歌舞伎のパフレットに私が載っているよ」と反応し、小原歌舞伎の演目について友達に話す様子が見られた【資料2】。



【資料2】パンフレットを手にするB児

A児はコーナーにある資料を使った授業で、図書資料に加えて、QRコードから関連するウェブサイトアクセスし、問いの答えとなる情報を集めた。その際、参考文献として、どの資料を使ったのかについても記述することができた【資料3】。



【資料3】A児のワークシート

また、「小原二フレル調査隊」と題し、和紙工房・民話の場所・小原観光協会に行く校外学習を行った。A児は、小原の民話に登場する「地獄谷」を実際に歩きながら、「一番大きな岩はだいたい何歩分あるのかな。」と疑問をもち、友達と一緒に歩いてその大きさを記録した【資料4】。



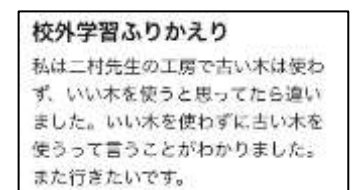
【資料4】岩の上を歩くA児

事前にコーナーにある民話の本を読んだり、DVDを見たりしていたことで、民話に書かれていたことと、実際に目で見たとを比較するなど、意欲をもって活動することができた。

B児は、和紙工房で実際に職人が作ったものを見たり、手で触れたり、インタビューしたりしながら、分かったことや感じたことをワークシートに箇条書きでメモした。事前に図書資料やインターネットで調べた内容に加えて、校外学習で得た情報を根拠として、自分が理解したことを書くことができた。今回インタビューをしたのは、毎年和紙作りで指導をしてくださる方だったが、今回の校外学習を通して、これまでも関わりのあった職人の姿を改めて感じ取った【資料5・6】。



【資料5】B児のワークシート



【資料6】B児の振り返りでの記述

（３）教科横断的な調べ学習の取組《手だて③》

総合的な学習の時間で調べ学習に入る前に、中央図書館管理課の高村先生による出前講座を依頼し、基本的な調べ方の手順について学ぶ機会を設けた。赤い付箋には自分が調べたい問いを書き、青い付箋に調べて得た答えを書いていくという方法である。

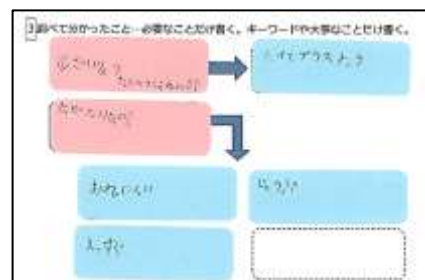
A 児は、最初付箋に何を書けばいいかわからないと戸惑った様子であったため、近くでサポートしながら調べ学習を進めた。調べて分かったことには、必要なこと（キーワードや大事なこと）だけを書くのがよいと学ぶと、付箋に短い言葉で必要な情報を抜き出すことができた【資料 7】。

B 児は、付箋を使った調べ方を習得したことで、まとめに自分の考えを記述することができた。そして、まとめを発表する際には、挙手をして自信をもって表現することができた【資料 8】。

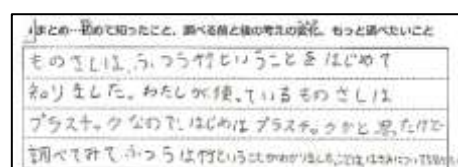
A 児は、「道具のひみつをつたえよう」では、付箋に分かったことを短く書き出すことができた。しかし、「火事からくらしを守る」では、付箋なしでノートにまとめていく方法で行った結果、必要なことを短く書き出すことができなかった。そこで、総合では再度付箋を使った調べ学習を行ったが、多様な情報源を前に手が止まる時間が長く、必要な情報を十分には書き出すことができなかった。グループで共有する際も、自分が書いたことをうまく伝えられず、内容を理解していないまま書き出してしまっていることが分かった。

B 児は、「道具のひみつをつたえよう」と「火事からくらしを守る」において、出前講座で学んだ調べ方を生かし、自らの問いに対して図書資料から必要な情報を書き出すことができた【資料 9】。その後の総合での調べ学習でも、必要な情報を探して付箋に書き出すことができた。グループで共有する際には、友達と協力して意見を分類し、見出しをつけるところまで進めた。振り返りには、「代表になったらみんなに伝えるように頑張る」と記述し、調べ学習を通して地域の魅力を捉えられたとともに、意欲や自信をもつことができた様子であった【資料 10・11】。

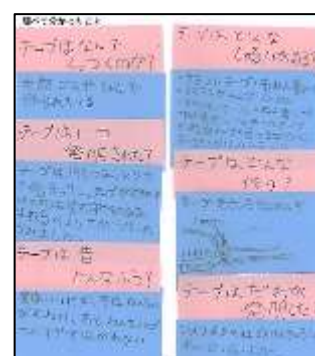
そして本単位では、学びの成果を発信する機会として、冷田小学校へのオンライン発表と、保護者や地域の方々に向けた学習発表会での発表という二段階のゴールを設定した。児童が相手意識や目的意識をもって発表に取り組めるよう、発表相手の違いや発表の目的を確認した。その上で、どのような発表方法が効果的であるかについて児童自身に考えさせ、話し合いを通して発表内容や方法を決定させた。発表に向けて内容を整理する際には、インタビューで得た情報と図書資料に記載されている内容の両方を参照しながら、根拠を明確にしてまとめる姿が見られた。児童は、現地調査やイ



【資料 7】A 児のワークシート



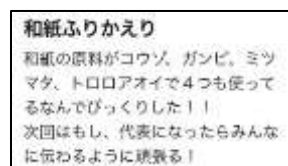
【資料 8】B 児のワークシート



【資料 9】B 児の国語のワークシート



【資料 10】分類した付箋を見て
振り返りを書く B 児



【資料 11】B 児の振り返りでの記述



【資料 12】発表資料を作成する A 児

ンタビューで得た情報をそのまままとめるのではなく、図書資料に立ち返って事実を確認したり、複数の情報を比較したりしながら発表資料を作成していた【資料12】。

A児は、冷田小学校に向けたオンライン発表で、「地獄谷」について紙芝居を用いて紹介したり、現地調査で分かったことをクイズ形式で伝えたりするなど、相手に分かりやすく伝える工夫を行った【資料13】。



【資料13】オンラインで発表するA児

また、B児は学習発表会において小原歌舞伎についての発表を担当した。B児は、小原歌舞伎に関するパンフレットなどの図書資料で調べた内容に加え、隈取体験で学んだことや、その際に関わった地域の方から聞き取った内容を関連付けながらスライドを作成した。そして、ペアの児童と協力して発表原稿を作成し、練習を重ねることで内容を十分に理解した上で、本番では原稿に頼ることなく、自分たちの言葉で自信をもって発表することができた【資料14】。



【資料14】学習発表会で発表するB児

7 成果と課題

(1) 〈仮説1〉について

《手だて①》は第1時と第2時の2つの検証場面でともに有効であった。単元のはじめに思考ツールを活用して、自分たちで課題や問いを立て、興味関心をもった状態でスタートしたことで「小原の魅力をもっと知りたい」「問いを解決したい」と地域の魅力を多面的に捉えるための意欲を高めることができた。以上から、〈仮説1〉については妥当であったと考えられる。

(2) 〈仮説2〉について

《手だて②》は有効であった。学校図書館の環境を常に整えておいたり、校外学習で地域の人やものに実際に触れる機会をつくったりするなど、地域の多様な情報源を活用できるようにした。それにより、自ら学ぼうという主体性を向上させるとともに、情報活用能力も育むことができた。以上から、〈仮説2〉については妥当であったと考えられる。

(3) 〈仮説3〉について

《手だて③》は不十分であった。他教科での取り組みによって、児童は必要な情報を見つけ出すことができるようになっていったが、多様な情報源を前にすると手が止まってしまうことが多かった。そして、うまく情報を書き出せないことで、自信をもてない様子が見られた。以上により、〈仮説3〉については改善の余地があると考えられる。

(4) 今後の課題

今回の実践で、多様な情報源を活用することは、児童の主体的な学びを促し、情報活用能力を育成することに有効であるとともに、地域の多面的な魅力を捉えることにもつながると実感した。しかし、多様な情報源を扱うときこそ、児童が必要な情報にたどり着くための様々な手だてが必要であることが分かった。特に、地域に関する資料の中には、内容や表現が難しいものも多く、必要な情報を見つけたり整理したりすることに困難が見られた。今後は、地域にある貴重な情報源の中から、探究課題に応じて必要な情報を探し出し、活用できるようにするためにはどのような手だてが有効であるのかについて、実践を重ねながら検討していきたい。